

くらしナビ 医療 Medical

kenko@mbx.mainichi.co.jp

NAVIGATOR

クリニックラウン

活動広げる「病院の道化師」。
子どもたちにどんな効果があるの。

笑い通じ 成長支える

赤い鼻を付けた医師が小児病棟に入り、笑いを振りまいて子どもたちを元気にする。米映画「パッチ・アダムス」(98年制作)に登場した「病院の道化師」が日本でも活躍している。今年で5年目を迎える日本クリニックラウン協会(本部・大阪市)の活動は、国内14病院(08年度)に広がっている。

クリニックラウンは、病院を意味する「クリニック」と道化師を指す「クラウン」を合わせた英語の造語。優れた演技手であると同時に、子どもとの接し方や児童心理、保健衛生や病院の規則にも詳しいスペシャリストだ。日本語では「臨床道化師」と訳され、同協会は13人を認定している。闘病生活が

長くなると、病室を訪れるのは白衣の医

児童心理、接し方など学んだ専門家

師や看護師、親など大人ばかりで、子どもは自然に、治療を受ける受け身の姿勢になりやすい。クリニックラウンは、病室を定期的に訪問し、遊びなどを通して子どもたちの成長を支えている。

同協会の塚原成幸事務局長は「入院中、治療のためのさまざまな制限を受けている子どもたちが思い切り笑い、主体的に遊ぶことができる環境作りが大切な役割」と話す。

5月19日、大ちゃんとTOMO(トモ)さんの男女1組

1年かけ養成、試験経て認定

日本クリニックラウン協会によると、クリニックラウンになるには、募集から認定まで約1年の養成期間が必要という。

養成トレーニングでは、相手に恐怖感を与えないコミュニケーションや適切な距離の取り方、即興的な動きなど病室での身体表現方法を学ぶ。また、0~18歳と幅広い年齢に即した子どもたちのかかわり方や子どもを取り巻く環境、保健衛生の基礎知識、残された家族のケアなど、臨床現場に入るための講義を受ける。病院での臨床研修を受けて経験を積み、最後に認定試験を受ける。

現在認定されている13人は、演劇やダンスなどの経験者や医療・福祉関係者など。問い合わせは日本クリニックラウン協会(06・6575・5592)。

主体的に遊べる環境作りに一役

のクリニックラウンが水戸市の茨城県立こども病院を訪れた。同協会は2年前から月1回定期的に派遣している。

病院スタッフと一人一人の病状や付き添いの親の状況などを打ち合わせた後、長期入院している子どもたちの病棟に入った。すると、突然近くの部屋の扉が開いて「ピエロが来たー」という歓声が上がった。クリニックラウンは4、5人の幼児からお尻にパンチを浴び、逃げ惑った。

病室から男の子が窓ガラス越しにその様子を見つめていた。恥ずかしがりやで病室から出たがらない子だという。トモさんが注意深く病室に入

ると、男の子は大喜び。「外に出る」と言って病室を出ると、大ちゃんや他の子どもたちと廊下でパレードを始めた。付き添いの祖母が「さっきまで暗い顔をしていたのに、すごいですね」と感激していた。病棟訪問の後は、クリニックラウンから一人一人の子どもの様子などが病院側に報告された。

病院スタッフで子どもたちの精神的負担を軽減し、発育を手助けする専門職、チャイルド・ライフ・スペシャリストの松井基子さんは「お姉さんらしく振る舞っている子が普段とは違う子どもらしい表情を見せたり、日ごろはおとなしい子どもが自分から積極的に行動を起こすこともある」とその効果に期待する。

同協会によると、クリニックラウンの先進地オランダでは国民的な理解が深い。同国のクリニックラウン財団は年間の寄付だけで10億円以上の予算があり、約9割の小児医療施設を訪れているという。日本でもクリニックラウンへの期待は広がっているが、個人的寄付が集まりにくい。自分の仕事をもちながら活動をしているのが実態で、継続して活動できる方法を模索しているという。【石塚孝志(写真も)】



子どもたちの病室に現れたクリニックラウンのトモさん(右)と大ちゃん—水戸市の茨城県立こども病院で